

## アドミッション・ポリシーの違いをもたらす要因の検討

齋藤朗宏（北九州市立大学経済学部）

### 1 はじめに

#### 1.1 アドミッション・ポリシー

平成 11 年の中央教育審議会答申において、それぞれの大学（学部・学科）の教育理念、目的、特色等に応じて受験生に求める能力、適性等についての考え方をまとめた入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）を大学が確立し、対外的に明示するとともに、選抜方法や出題内容等に反映させることが重要であるとの指摘が行われた。これに始まり、平成 20 年の同じく中央教育審議会答申では、大学は、大学と受験生のマッチングの観点から入学者受入れ方針を明確化する必要があるとの指摘がなされている。さらに、平成 22 年 6 月の学校教育法施行規則一部改正により、大学が公表すべき情報が明確化され、上記の内容を含めた各種情報を、インターネットを含めて広く公開することが定められるなど、大学入試においてアドミッション・ポリシーをより重視する方向に進んでいるのは明らかである。

アドミッション・ポリシーの最も大規模な調査としては、嶋野他(2004)が挙げられる。同研究では、各大学にアンケート調査を行い、制定されているアドミッション・ポリシーの内容、策定水準(大学全体のポリシーか、学部レベルか、学科レベルかなど)等に関する分析を行っている。また、これに引き続き、嶋野他(2006)では、高等学校側から見たアドミッ

ション・ポリシーに注目し、高校生、また、高校教員に対する調査を行っている。

齋藤(2013)では、各大学経済学部を対象を絞り込んだデータベースを作成し、テキストマイニングの手法を用いて分析、単語のクラスタリングや、アドミッション・ポリシーの類型に関する検討を行っている。その結果、多くの大学では、入学前の段階で必要なものとして、身につけておくべき学力、思考力等の一般的能力を、また、入学後にきちんと勉学に取り組むために必要な条件として、専門分野に関する興味関心、卒業後の進路に対するビジョンを要求していることなどを確認している。

また、国公立という設置者での違いについても検討されており、論理的思考力等抽象的な能力を重視する国立大学と、課外活動や資格など、より具体的な成果を重視する私立大学というような違いが示されている。

#### 1.2 研究目的

本研究では、齋藤(2013)で作成されたデータベース並びに内容の 6 つの類型を用い、内容の違いがどのような要因の影響によって起こるのかを分析、検討する。この分析を通して、アドミッション・ポリシーに対して理解を深め、大学間での生徒獲得競争が激化する今後に向け、大学がどのような形で個性を出していくべきなのか、検討するための材料と

表 1 内容別，設置別分類別集計(齋藤，2013，表 2)

	意欲	展望	表現力	思考力	学力	科目
国立	22 (96%)	15 (65%)	9 (39%)	13 (56%)	13 (56%)	7 (30%)
公立	12 (92%)	6 (46%)	4 (31%)	2 (15%)	7 (54%)	1 (8%)
私立	91 (97%)	46 (49%)	15 (16%)	7 (7%)	38 (40%)	20 (8%)
合計	125 (96%)	67 (52%)	28 (22%)	22 (17%)	58 (45%)	28 (22%)

することを目的とする。尚，今回使用する 6 つの類型並びにそれぞれの頻度は表 1 の通りである。

## 2 方法

### 2.1 データベースへの情報追加

要因検討のため，まず齋藤(2013)で作成したデータに情報の追加を行った。アドミッション・ポリシーは国公立大学という設置別で異なり，大学の入試困難度や地域性などがその原因になっている可能性を齋藤(2013)では指摘している。それに従い，当該学部の偏差値並びに住所の情報を追加した。

追加に用いたのは，駿台予備校(2006)によるデータである。齋藤(2013)のデータと比較すると，2 大学が新規開校，または新規学部のため掲載されておらず，合計 128 大学についてデータの追加を行っている。この 128 大学が，本研究における分析対象となる。内訳は，国立 23 大学，公立 12 大学，私立 93 大学であった。

追加した情報を利用し，まず学部住所からいくつかの分類を行った。1 つめは，北海道・東北，関東，中部，近畿，中国・四国，九州・沖縄の 6 地方への分類である。後述の表 1 にもあるように，北海道と東北，中国と四国は大学数が多くないことも考慮し，それぞれ 1 つにまとめた地方区分を採用している。

2 つめは，東京・大阪・名古屋圏内の大学か否かという情報の設定である。この分類では，東京は東京国際フォーラム(旧東京都庁，東京都千代田区)を中心とした 70 キロ圏，名

古屋は名古屋市役所(名古屋市中区)を中心とした 50 キロ圏，大阪は大阪市役所(大阪市北区)を中心とした 50 キロ圏を基準とした。これは，国勢調査などでよく用いられている基準である。この基準では，東京 70 キロ圏に属するのは東京，埼玉，千葉，神奈川のほぼ全域，小山市など栃木県南部，つくば市など茨城県南部である。同様に，名古屋 50 キロ圏に属するのは渥美半島周辺を除く愛知県ほぼ全域，岐阜市，美濃市など岐阜県南部，四日市市，鈴鹿市など三重県北部である。また，大阪 50 キロ圏に属するのは大阪府全域，京都市中心部など京都府南部，津市など滋賀県南部，神戸市，明石市など兵庫県東部，奈良市など奈良県北部である。

この他にも都市圏の基準には様々なものがあるが，基本的に，大学は大都市の近辺にあることが多いため，たとえば同じく国勢調査など，総務省で用いられている 8 大都市圏，6 都市圏を用いると，合わせて 14 都市圏内にほぼすべての大学が所在することになってしまう。これを防ぐために，都市圏内外にある程度近い数の大学が所在することになる基準として，比較的厳しい基準である 3 つの大都市からの所定キロ圏を用いている。この分類では，3 大都市圏内が 72 大学，圏外が 56 大学となった。

これらの情報について，設置別で集計した結果は表 2 の通りである。ここから，全体の 5 割以上の大学が関東地方か近畿地方にあり，私立大学に限れば，全体の 6 割以上という結果になっている点，国公立大学は各地方に満

遍なくある点が見られる。また、それらを反映して、国公立は3大都市圏外の方が多い一方で、私立は3大都市圏内にあることが多い点なども確認できる。

表 2 地方，都市圏ごとの大学分類

	国立	公立	私立	総計
北海道・東北	3	2	8	13
関東	4	2	34	40
中部	4	1	11	16
近畿	5	3	23	31
中国・四国	4	2	6	12
九州・沖縄	3	2	11	16
70,50km 圏外	16	7	33	56
70,50km 圏内	7	5	60	72
総計	23	12	93	128

続いて、偏差値情報についても確認を行った。全 128 大学の偏差値は、平均 45.91、標準偏差 8.37 であり、設置別で見ると、国立が平均 54.43、公立が 50.67、私立が 43.19 であった。

## 2.2 集計と分析

これらの情報について、以下の手順で集計並びに分析を行った。

1. それぞれの地方，70km または 50km 都市圏内外で，6 つの類型についてどの程度の割合の大学が提示しているかを整理，確認する。
2. 大学を偏差値で区分した上で，6 つの類型について，どの程度の割合の大学が提示しているかを整理，確認する。
3. 1, 2 の結果，特徴的な傾向を示している類型と大学の地域や偏差値との組み合わせについて，ロジスティック回帰分析により，変数の有無，値の大きさが類型の出現率にどのように影響を与えているのかを確認する。

## 3 結果と考察

### 3.1 出現率に注目した集計

それぞれの地方，70km または 50km 都市圏内か否か，偏差値を四捨五入した値で分類した結果ごとの 6 類型に関する集計結果は表 3 のとおりであった。これらの集計結果と，表末にある総計，即ち全体地方や偏差値を問わない値との間で割合に差があれば，その部分が地方等に特有の傾向があることを示唆しており，より詳細な分析を行う必要があると考えられる。

1 列目、「意欲」に注目すると，全体で 96.1% であるのに対して，どの行においても 92.3% から 100% の範囲となっており，地方や偏差値等を問わず普遍的な内容であると思われる。

以下同様に、「展望」では，全体で 50.8% であるのに対して，地方別では最も低い関東地方の 37.5% から最も高い中部地方，中国・四国地方の 75% まで，ある程度の幅をもって散らばっている。70, 50km 圏内外についても差が大きく，都心部以外の方が言及されやすいことが見て取れた。また，特に大きな違いが見られたのは，偏差値による結果である。元々大学数の少ない偏差値 30 前後に関する例外はあるものの，偏差値 40 周辺で 62% であるものが，偏差値が上がるにつれて徐々に減少し，偏差値 70 周辺では 0 になっている。ここから，展望については，特に偏差値に注目して検討する必要がある。

「表現力」では，中国・四国地方で割合が大きくなっているが，中国・四国地方は大学数が多くなく，偶然の可能性は否定できない。70, 50km 圏内外で見ると，圏外での出現率が高いところから，特に圏内外に注目すべきだろう。偏差値については，中程度，50 周辺で高く，高偏差値，低偏差値帯では低いことが確認できる。ここから，中偏差値帯で特有の内容である可能性が示されるが，このような結果は，ロジスティック回帰分析にも適さず，検討も困難であり今後の課題としたい。

表 3 地方，都市圏，偏差値別集計

	意欲	展望	表現力	思考力	学力	科目
北海道・東北	12(92.3%)	6(46.2%)	0(0%)	1(7.7%)	4(30.8%)	1(7.7%)
関東	38(95%)	15(37.5%)	11(27.5%)	9(22.5%)	23(57.5%)	13(32.5%)
中部	16(100%)	12(75%)	1(6.3%)	0(0%)	2(12.5%)	1(6.3%)
近畿	31(100%)	13(41.9%)	6(19.4%)	5(16.1%)	16(51.6%)	8(25.8%)
中国・四国	11(91.7%)	9(75%)	5(41.7%)	4(33.3%)	8(66.7%)	3(25%)
九州・沖縄	15(93.8%)	10(62.5%)	4(25%)	3(18.8%)	5(31.3%)	2(12.5%)
70,50km 圏外	53(94.6%)	33(58.9%)	13(23.2%)	9(16.1%)	21(37.5%)	8(14.3%)
70,50km 圏内	70(97.2%)	32(44.4%)	14(19.4%)	13(18.1%)	37(51.4%)	20(27.8%)
30	8(100%)	4(50%)	0(0%)	0(0%)	1(12.5%)	0(0%)
40	49(98%)	31(62%)	7(14%)	1(2%)	18(36%)	11(22%)
50	45(93.8%)	23(47.9%)	16(33.3%)	12(25%)	27(56.3%)	12(25%)
60	17(94.4%)	7(38.9%)	4(22.2%)	7(38.9%)	11(61.1%)	4(22.2%)
70	4(100%)	0(0%)	0(0%)	2(50%)	1(25%)	1(25%)
総計	123(96.1%)	65(50.8%)	27(21.1%)	22(17.2%)	58(45.3%)	28(21.9%)

表 4 ロジスティック回帰分析によって推定された係数と有意確率

	展望	表現力	思考力	学力	科目
切片	5.31(0.3%)**	-1.13(10.5%)	-7.53(0.1%)**	-2.17(16.1%)	-2.93(0.8%)**
国立	1.44(5.9%)	0.67(40.2%)	1.52(9.2%)	-0.18(80.8%)	1.75(13.1%)
私立	-0.65(37.2%)	-0.57(43.9%)	-0.36(68.9%)	-0.53(44.6%)	0.91(40.3%)
圏内外	0.16(72.2%)	0.07(87.6%)	—	0.55(20.9%)	1.02(4.3%)*
偏差値	-0.11(0.1%)**	—	0.12(0.6%)**	0.05(12.4%)	—

先行研究においても設置別における差が顕著に出た「思考力」は、偏差値において大きな差が見られた。低偏差値帯から高偏差値帯にかけて、明確に増加していることが確認できる。

「学力」も、大学数の少ない偏差値 70 以上を除いて概ね偏差値の高い大学ほど言及されやすい傾向が見て取れる。また、大学数の多い関東，近畿圏での出現率が高い点，70, 50km 圏内での出現率が明らかに高い点など，地域性も否定できない結果であった。

「科目」については，学力同様に地域差が確認できる一方で，偏差値による差はほぼ見

られなかった。70, 50km 圏内で出現率が高い一方で，70, 50km 圏内に多い私立大学では表 1 にあるように出現率が低いということで，特に地域差の可能性が示唆される。

### 3.2 ロジスティック回帰分析による要因の影響の検討

3.1 の結果を踏まえ，ロジスティック回帰分析により影響が示唆された要因について，その影響が実際にあるのかを検討する。具体的に検討の対象としたのは以下の類型，要因の組み合わせである。

1. 「展望」と「設置者」，「70, 50km 圏内

- 外」,「偏差値」
2. 「表現力」と「設置者」,「70, 50km 圏内外」
  3. 「思考力」と「設置者」,「偏差値」
  4. 「学力」と「設置者」,「70, 50km 圏内外」,「偏差値」
  5. 「科目」と「設置者」,「70, 50km 圏内外」

ロジスティック回帰分析の結果では、特に係数の値とその係数が有意であるか否かに注目する。係数の値は、その要因の有無、値によって、予測がどのように動くのかを示すものであり、たとえば変数「偏差値」に対して係数が正であれば、偏差値が高ければ、その類型に言及している確率が高いことを示す。また、その係数が有意であるという情報は、その要因がある類型について言及しているか否かの確率に影響を与えるという証拠となるものである。尚、推定にはR2. 15. 2の関数「glm」を用いた。

ロジスティック回帰分析による係数の推定結果、有意確率は表4の通りである。尚、表中の\*は  $p < 5\%$ 、\*\*は  $p < 1\%$ を意味している。また、設置別の推定では国立と私立の結果のみが示され、公立大学が示されていない。これは、名義カテゴリ変数を用いた推定の都合上、公立大学を基準(係数 0)と設定し、国立大学、私立大学は公立大学との違いで示しているためである。

表のうち、「切片」は、設置者や地域、偏差値を問わないその類型の言及されやすさを示しており、本研究における興味の対象にはあたらぬ。そこで、「切片」以外で\*が表示されているセルに注目すると、「展望」と「思考力」における「偏差値」,「科目」における「圏内外」がそれぞれ有意になっている点を確認できた。

「展望」における「偏差値」は、表3において検討した通り、偏差値が高い大学ほど言及されにくい内容である。他の変数の内容を

考慮に入れても尚高度に有意な結果が得られた点から、このことが確認できたと考えられる。

「科目」における「圏内外」は、有意確率がほぼ5%であり、検定の繰り返しということも考えると、明確に有意と言えるものではない。ただ、出現率に倍近い差があり、今後サンプルを増やすことで、地域性が出る要因なのか否かを検討することが出来るだろう。

特に注目しているのが「思考力」における「偏差値」の影響である。「思考力」は、齋藤(2013)など、従来は設置者の影響が大きいと見られていたものであったが、実際には偏差値の高い大学ほど言及されやすいものであり、「偏差値」の影響を取り除くと、設置者の影響は確実なものとは言えないことが確認できた。

#### 4 まとめ

アドミッション・ポリシーの内容について、外的要因を説明変数として加えて分析することで、外的要因によって、内容に差異が出るのかについて検討を行った。その結果、「思考力」を要求しているのは偏差値の高い大学に集中している点など、特に大学の偏差値による影響が無視できないことが確認できた。一方で、外的な変数の影響が見られない内容もあり、大学が個性を出すことを考える上では、外的な変数の影響を受けず、自分たちで決められる内容をより重視していく必要があるのではないだろうか。

今後の課題としては、外的な変数として用いたものが住所と偏差値のみと少なかったため、より多くの変数を用いた検討を行う必要がある点がまず挙げられる。また、住所についても、基本的には3大都市圏か否かのみが検討の対象となっていたため、地方ごとの違いについても、より明確にする必要がある。今回はロジスティック回帰分析を用いたので、たとえば「表現力」のように、中程度の

偏差値帯でよく言及される内容についての検討などを行うことが出来なかった。これらの点に関する検討も必要であろうと思われる。

## 参考文献

- 文部科学省 中央教育審議会(1999). 『初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)』(平成11年12月24日).
- 文部科学省 中央教育審議会(2008). 『学士課程教育の構築に向けて(答申)』(平成20年12月16日).
- 鳴野英彦他(2004). 「アドミッション・ポリシーと入学受入方策」大学入試センター研究開発部共同研究報告書.
- 鳴野英彦他(2006). 「高等学校における進学情報の利活用とアドミッション・ポリシー」大学入試センター研究開発部共同研究報告書.
- 齋藤朗宏(2013). 「各大学経済学部におけるアドミッション・ポリシーのテキストマイニングによる分析」『大学入試研究ジャーナル』 **23**, 171-178.
- 学校法人駿河台学園 駿台予備校(2006). 「大学選びの決定版! 大学受験ガイド(2007年度版)」高橋書店.